

田舎の子供

常 石 貞

朝露をふくむ茄子畑の間を通つて、今日も卵を末吉さんの家まで買ひに行く。

朝霧につままれた土藏がぼうまかすんで牛小屋はもう綺麗に掃除されてあつた。鶏舎のそばの瓦屋根の家がそれなのだ。末さんが働き者なので、父時代の借金も返し土藏までたてる程になつたのだが、支那事變突發以來、働手の末さんが召しに應じ出征して今では老母と若い妻君が五つを頭に三人の子と共に家を守つてゐる。朝六時といふのにもう、おかみさんは田へ出て、子供三人を守る婆さんばかりであつた。広い板間にござをひいて、三人の子供が朝飯を喰へてゐる。「お許しなして」私は、わざと地方訛りでつて土間に入つた。

三人の子は一齊にこちらをむいた。味噌汁をかけた飯粒

を口のまわりに一ぱいつけて。昨年十月に生れたばかりだといふ男の子が、味噌汁をかけた御飯をたべてゐるのに驚いた私は、暫く二歳の此の兒をあやしてゐた。上の五つの子はもう御飯もすまして、たうもろこしをかじりながら田甫へ出た。土間に腰をかけて、百合やたうもろこしの葉かげから子供の後姿をぼんやりながめてゐた。

「やあ金ちゃんが出来た」「金の一錢銅貨が出来た」三人のわんぱく小僧が、炒つたそら豆の皮をまきちらしながらやつて来た。中に國藏さんの所の芳ちゃんもゐる。六つ七つの就學前の幼児であらうが、我兒なきは比較にもならぬ手足のがつちりした兒ばかりである。

「金ちんの一錢銅貨で、飴買って、喰へるこえゝなあ。」
 ミ芳ちゃんがおきけて云ふに、金ちゃんは急いで我が後頭

部に手をやつて、はげをかくした。それをみた他の兒はわつさ笑つた。そして、口々に「金ちやん、君の横もはげかゝつてゐるよ、今度は前からだせ」云ふ。金ちやんは泣きさうになつて手にもつてゐたうもろこしのたべかけを芳ちやんめがけて投げつけた。年上の芳ちやんはうまく受けまつて、それをかぢりながら「二つ、一所はげて來た」云音頭

- 二つ フタ
二所はげて來た
三つ ミツ
三所はげて來た
四つ ヨツ
横まではげて來た
五つ イツ
五所はげて來た
六つ ムツ
むくむくはげて來た
七つ ナナ
なかなかほらない
八つ ヤツ
やかんになりさうだ
九つ コツ
こゝまではげて來た
十つ トツ
さうさう大やかん

こふしをつけ面白さうにからかつてゐる。

誰が教へたか覺えたか知らぬが、他の兒の缺點をあげて

はやす等さいふ事は、幼稚園教育をうけてゐる幼兒にはみられぬ事と思つた。

私は大人氣もなくむつこして、懐にしのばせたキャラメルを金ちやんの手に握らせた。それをみた子供等はわつこはやして、

はげをちよつこみて毛がない候

蠅がこまつて すべつて 候

こ手をたゝいて、憎さげに云ふ。何か云はうこした時「卵が又あがりまして大粒は一つ四錢だす。お氣の毒やけ」云鶏舎から婆さんが、卵をもつて出て來た。私は六つ卵を受取つて、籠に入れ二十四錢を婆さんの手に渡した。婆さんは、おそろおそろ「何か變つた事でも出て居りますまいか」こきいた。こゝらの農家では忙しいので平素新聞をこらな

い。年末より四月までの農閑期の外はよまないのである。

私は胸があつくなつた。今日の新聞はまだみないけれど、昨日の新聞には戦死戦傷の人々の中には息子さんの名はなかつた。何か變つた事があれば留守宅には一番先に知らせて來る筈ださいふ事をはなして、息子さんから便りなく

も勇ましく働いて居られるのだらう等々、婆さんご話をし
てゐるに「わつ」ミ金ちゃん泣く聲がした。私は婆さんよ
り先へ、飛び出した。

金ちゃんはキャラメルをさられてしまつたのである。紺
がすりの肩を、ふるはせながら

「芳ちゃんが手をねちつてキャラメルを取つた」

さいつて、婆さんの腰にかちりつきながら泣きぢやくつ
てゐた。結句大人が肩をもつたばかりに年上の男の子に反
感を買つて、手をねぢられたばかりか、キャラメルも取ら
れてしまつた。

「金ちゃんごめんなさいね」私は心の中で餘計な事をした
さ後悔をした。

末さんは我子のいぢめられてゐるのも知らず第一線にた
つて奮闘してゐるだらう。おかみさんはつかれた腰をのば
し、田の中にうつる我が面影が、遠い戦地の我がつまに、
せめて夢にも通へかしこせつない女心をつゝんで、又せつ
せき働いてゐるだらう。卵の籠をさげて考へながら歩いて
ゐるに、目の先に目のくりくした、きかん坊の芳ちゃん

が、あらはれた。

「がんばりのおやぢになぐられて」ミ「歡呼の聲におくられ
て」さいふ歌をもちつてうたつてゐる。私は思はず可笑し
くなつたに、同時にこの利口な兒を適當な環境の許におけ
ばすぐれた智能を有するやさしい兒に、なるのではないか
と思つた。私は今までの「憎らしい兒」さいふ感がすつかり
消えて、急いで、畑の枝豆を一束ぬいて芳ちゃんにもたせ
ながら、「芳ちゃん、金ちゃんミなかよく遊んで頂戴ね」さ
いつた。我が畑であつたから。（昭和十二年八月一日の朝）

新刊 日本国旗 日の丸の旗

倉橋先生作詞、小松先生作曲、戸倉先生振付の、三拍子揃
つた「日本の旗 日の丸の旗」の樂譜が、この程出版になりま
した。時局柄、子供に歌はせ踊らせたいものゝ一つでござい
ます。私共は朝、國旗を掲げる時にも歌ひ、遊戯にも最初に
歌ひそして踊つて、時局を心にししのばせて居ります。
廣く家庭にも行き互るやうにどの心組から、表紙は幼兒の
喜びさうな繪を綺麗な色刷りにしてございませう。賣上の金額
は全部國防費として獻金致す事になつて居ります。
皆様の幼稚園だけでなく、各御家庭へもご吹聴願へればこ
の上もなく嬉しく存じます。

（附屬幼稚園 係り）